

# 二宮金次郎物語



小田原市教育委員会

# 一宮金次郎物語

## 目次

はじめに	1
一、金次郎の出発	
おいたち	3
苦しい生活のなかでの発見	5
一家の立て直し	11
服部家の立て直し	15
二、桜町仕法	
大久保忠真と金次郎	20
桜町赴任	23
成田山にこもる	26
天保のききん	29
三、幕府登用	
幕府の役人となる	33
仕法ひな形の完成	35
尊徳の死	37
四、尊徳の教え	39

（金次郎の年齢は数え年を用いています。数え年とは、生まれた年を一歳とし、以後正月になると一歳を加えて数える年齢です。）



## はじめに

二宮尊徳（金次郎）は、天明七年（一七八七）現在の小田原市栢山に生まれ、安政三年（一八五六）現在の栃木県日光市今市で亡くなりました。二宮尊徳というと、多くの小学校の校庭に、背中に薪を背負って、本を読みながら歩いている像があり、少年時代の金次郎については、知っている人も多いと思います。しかし、生涯にどのようなことをし、どのようなことを人びとに教えたのかを詳しく知る人は少ないと思います。

おとなになった二宮尊徳は、生涯を世のため、人のために捧げ、各地の財政や農村の立て直しに力を尽くしました。こうして農村が経済的にも困っていた時代に、尊徳が復興事業を手がけた村々は六百力以上にのぼります。そして多くの藩や農村を貧しい生活から救い、その優れた思想と実践で人びとの幸せを追求し続けた世界にも誇れる人です。

平成一七年は、そのような郷土の偉人である二宮尊徳が亡くなって百五十年になります。そこでこの機会に、小学生向けの読み物資料を作成しました。

この読み物資料作成に当たっては、元小田原市教育研究所長であつた高田稔先生が、二宮尊徳百二十年祭を機会に、記念事業会副会長の佐々井典比古先生のご教示を得て、書かれた「二宮尊徳青少年のために」をもとにして、その内容を小学生に理解でき、また、より興味を持って読めるも

のにということをめざして作成にあたりました。

この冊子の編集に携わる前までは、児童と一緒に、二宮尊徳の生家や関連の施設に行ったり、本で調べたりするなどして二宮尊徳を身近に感じ、知っているつもりでいました。しかし、生涯にわたって、くわしく学んでいけばいくほど現代社会に十分通じる二宮尊徳の考え方、実践力などその偉大さにふれ、驚きを感じています。

高田 稔先生の「二宮尊徳 青少年のために」の中に、

「ある歴史学者は尊徳を評して『もし乱世に生まれていれば、徳川家康クラス、おそらく天下を統一するようなことをやってのけたのではないか、それほど偉大な人物だ。』』と語っています。」という文章があります。

二宮尊徳の思想や実践は、百五十年以上経過した今日でも、いや、このような難しい時代だからこそ多くの学ぶべきものがあると思います。そのことをすこしでも多くの小学生に理解してもらいたいと思います。

# 一、金次郎の出発

## おいたち

神奈川県小田原市に栢山<sup>かやま</sup>というところがありますが、このあたりは、富士山と丹沢山のふもとから流れ出る酒匂川によって作られた、足柄平野の中央にある農村地帯<sup>ちたい</sup>でした。

今から二百二十年ほど前の天明七年<sup>てんめい</sup>（一七八七）七月二十三日に二宮金次郎はこの栢山で生まれました。金次郎の家はかなりの地主であり、働きものの祖父銀右衛門<sup>ぎんえもん</sup>が土地を集めて父の利右衛門<sup>りえもん</sup>に伝えた田畑は、あわせて二町三反<sup>ちようさん</sup>（二・三ヘクタール）ほどでした。また、利右衛門は「栢山の善人<sup>ぜんにん</sup>」といわれるほどの人で、母のよしもやさしい人柄<sup>ひとがら</sup>で、何不由のなない平和な毎日を送っていました。

しかし、金次郎の生まれた天明七年は、幕府<sup>ばくふ</sup>の政治にも、



また小田原藩<sup>はん</sup>の政治にも暗いかげがさしかかった年でした。このころ、各地にききん<sup>のうさくもつ</sup>（農作物がとれないために食べ物<sup>も</sup>がたりなくなる<sup>もと</sup>こと）や天災<sup>さい</sup>がつづき、そのことによつて百姓<sup>ひやくしやう</sup>一揆<sup>いつぎ</sup>（農民が税<sup>ぜい</sup>の引き下げなどを求めておこした行動のこと）や打ちこわし（町では生活に苦しむ人びとが米屋などの金持ちをおそつて金品<sup>きんぴん</sup>をうばうなどをするさわぎ）が起<sup>お</sup>こりました。

金次郎一家の生活への不安は、早くもかれが生まれて四年後に始まったのです。

## 苦しい生活のなかでの発見

寛政三年（一七九一）八月には、関東地方を大きな暴風雨が襲いました。朝から降り続いた雨は夕方から大あらしとなり、夜になってますますはげしさをまし、ついに酒匂川の堤防がいたるところで切れて洪水になりました。栢山の被害は大きく、利右衛門の土地はほとんど石や砂の下にうまってしまうました。

五さいのおさない金次郎は、梁（柱の上にわたして屋根をささえる材木）の上によって、家の中までうずまいてくる濁流をふるえながら見ていました。

二宮家の貧しいくらしは、ここから始まるのです。

父の利右衛門は、石や砂でうまった田畑を元どおりにするためにけんめいに働きましたが、それは二年も三年もかかる、長いしんぼうのいるたいへんな仕事でした。その上たとえ水害で収穫が大きくへっても、殿さまに納める年貢米（税として納める米）はそれほどへらしてもらえなかったのだ、他の人からお米を借り、肥料を借り、お金を借りました。さらに、「栢山の善人」といわれた利右衛門は、他の人を助けるため自分の土地を失うということもあり、こうしたなかで、利右衛門はあれこれと心配したことから病気になる、ねこんでしまいました。

十さいをこした金次郎は、けなげにも父にかわって酒匂川の堤防工事に出て、おとなたちの中に





まじって働いたり、工事にでている人たちのために、夜はわらじを作ったりしました。またわらじを売り、そのお金でお酒を買って父親を喜ばせたり、他の家の子守にやとわれて家計の助けもしました。

しかし、このような金次郎のけん命な努力もむなしく、利右衛門は寛政十二年、四十八さいで亡くなってしまいました。

父が死んでから、母のよしが幼い弟二人をかかえ、荒れた田畑を耕すがたをみて、金次郎は胸がしめつけられるようにつらい思いになりました。そのため金次郎はいつそうがんにばって働いたのです。かれは朝早く起きて、日が暮れるまで母を助けて畑仕事をし、夜は遅くまで縄をないました。

秋のとりのいれがよいそがしい時期がすぎ、富士山が雪化粧をし、箱根の山々から冷たい風が吹くころになるとときき取りが始まります。箱根山の中腹にある、栢山村の入会山（村の共有の山のことで、村のものならだれでもそこに入ってたき

ぎをとって帰ることができへ、約四キロの道を毎日のように金次郎は通いました。帰りは、重いたきぎを背負<sup>せお</sup>って家に運んだり、また小田原の城下でいい値で売れるので町へ売りに出かけたりもしました。

しかし、金次郎のけんめいの努力にもかかわらず、一家のくらしぶりは悪くなるばかりで、母は父が死んで二年後に、いろいろな苦しみや悩み<sup>なや</sup>が元で死んでしまいました。三十六さいのわかさでした。

この年、享和二年（一八〇二）、またも酒匂川がはんらんして、わずかに残った二宮家の土地もふたたび石や砂の下にうもれてしまいました。親を失い、土地も失った兄弟はどうしてよいか分からず、泣いてばかりいました。そこで親せきが集まって相談<sup>そうだん</sup>し、弟二人は母の実家に引きとられ、金次郎は、となりのおじ万兵衛<sup>まんべえ</sup>の家に身をよせることになりました。

金次郎は十六さいから十八さいまで、お



じ万兵衛の家で過ごしましたが、あるとき金次郎が夜おそく本を読んでいるのを見て、万兵衛はどなりつけました。「百姓に学問はいらぬ。少しでも早く寝て明日の仕事にそなえなければいけない。だいいち明かりとりの油がもったいない。」というのです。

しかし、この小言は親がわりの万兵衛としては当然のことでした。学問にはげむよりも、一日も早く一人前の百姓になつてもらいたい、そして家を立て直してもらいたい、とねがう万兵衛の、金次郎に対するあたたかさでもあるのでした。金次郎には、そのことがよく分かっていました。

金次郎は、幼いときから読書が好きでした。父の利右衛門から、村の名や人の名前をおしえられ、さらに童子教や実語教といった書物を学びました。まわりの山々を見ながら、それらの書物を声をはり上げて読み、その意味をかみしめた日もありました。また、入会山にたきぎを取りに行きながら、大きな声で暗唱したのは、「大学」という儒教（政治、道德



の教え）のむずかしい書物の一節だつたと伝えられています。

この勉強好きの金次郎に、村の人たちはいろいろなあだ名をつけました。田畑の仕事がないときは、堤防ていぼうの上で川の水の勢いいきわを観察したり、植えた松苗なえの手入れをしたり、本を読んだりするかれを「土手坊主ぼうず」といいました。また、きねで米をつき、臼うすのまわりを回りながら読書をするのを見ては「ぐるりーぺん」と笑ったりしました。しかし金次郎の学問を愛する心は、村人から笑われても万兵衛まんべえにしかかれてもくじけることはありませんでした。

そして金次郎は、おじさんに迷惑めいわくをかけない方法を考え、明かり取りの油の原料であるあぶら菜さいばいの栽培を思い立ち、友人から菜種五勺しやく（〇・〇九リットル）を借りて、近くの荒れ地あにまきました。それが翌年になって七升しやう（十二・六リットル）以上の收穫しゆうかくとなったのです。

また、この年十七さいの夏の初め、道ばたに捨ててあつた稲いねの苗をもつたいないと思い、荒れた沼地に植えておいたところ、秋には一俵びやう（六〇キロ）もの米がとれました。

この二つの体験は、金次郎にとって大きな教訓きょうくんになりました。わずかな種子から七升もの実、捨て苗から一俵もの米がとれる。この自然界の「小を積んで大と為すな」法則をあらためて感じました（積小為大せきしょうゐだい）。しかし、こんなことは百姓ひやくしやうならだれでも知っていることです。別におどろくことではないのですが、金次郎はその言葉をとても大切にしていきました。

「世の中の人びとは、とかく大きなことばかりを心がけているようだが、小さいことをこつこつ

やっていくことを忘れてはならないのである。小さいことは誰にでもできるというけれど、しなければできない。その小さなことをしないで、人びとは大きいことばかりに目をうばわれるからできないのだ。何事も小さいことからおこたらず積み重ねてやっていけば、どんな大きなことだってできるというものだ。」このことばの意味が、はつきりと分かったような気がしました。

金次郎は日ごろ一生けんめいに土を耕すとともに、学問をとおして自らの心を耕そうとしてきました。心を耕すということは、心を広げ理想をもつということです。

かれの今までの生活はあまりにも悲しく、苦しかったのです。父と母を失い、その上、兄弟がはなればなれになってしまいました。そこで金次郎は、なんとしても家を立て直して、兄弟一緒にくらしたいと願っていつそう仕事にはげみました。



## 一家の立て直し

おじの家に世話になって三年、金次郎はもう十八さいになりました。いつまでもおじの世話になっているわけにはいきません。一日も早く独立<sup>どくりつ</sup>して、以前からのねがいである、二宮家の立て直しをはたさなければならぬという気持ちが高まっていました。かれは生家の近くに小屋を建て、一人で住むようになりました。荒<sup>あ</sup>れたままになっていた田や畑に鋤<sup>くわ</sup>を入れ、そのあいまには、村の家々にやとわれてお金をかせぎました。体も大きい金次郎は、働くことには自信がありました。しかし、金次郎にとっては、自分の家だけでなく、本家も母の実家も同じようにかたむいていった様子をよくみているだけに、ふつうの百姓<sup>ひやくしやう</sup>の働きだけでは、家の立て直しはできないことを知っていました。

金次郎は一生けん命に働きました。特に、人がきらう荒れ地の開墾<sup>かいこん</sup>（山や野を開いて田や畑にすること）には力をつく



しました。けれども、開墾かいこんができると、それを耕すことは人にまかせて、自分はたきぎや米を小田原の城下じょうかまで売りに出たり、また米やお金を他の人にかして利息りそくをもらったり、侍さむらいの家に働きに出てお金をもらったりすることに力をそそぎました。

この時代は、土地には重い年貢ねんぐがかかっても、百姓ひやくしやうがたきぎや米などを売った利益りえきや、やとわれて働く人の給料には税金ぜいきんがかからなかったのです。

そうして得たお金で、かれは、父が人手に渡した田んぼを次々に買いもどしたり、別の田んぼを買い入れたりして、自分の土地をふやしていききました。

かれはこうして、自分の働きを最高に生かす方法で、家を立て直していったのです。

けれども金次郎は、二宮家を元のようにりっぱにすることだけにあけくれたわけではありません。貧しい人には利息を付けずに米やお金を貸したり、身寄りのない老人には手をさしのべたりしました。また母の実家にあずけられている弟の生活費や、祖母への小づかいや薬代をたびたび送ったり、二宮総本家の復興ふっこうのための基金ききんづくりを行ったりもしました。

幼いときの苦しい生活を身にしみて知っているだけに、周囲の貧しい人びとを見すごすことはできなかつたし、特に自分の家とつながりのある親せきがこまっていると、できるだけの手助けをする金次郎でした。

また、学問を好むかれは、やとわれてお金をかせぐのにも相手を選んでいました。

おじ万兵衛まんべえの家を出てから、かれは村の名主（その村をしきっていたいちばん上の人）である岡部家にしばしば出入りしましたが、岡部家では学問を好み、学者をよんで講義こうぎを聞くことが多かったので、その時には金次郎もいっしょに熱心にその話を聞いていました。

そののち、小田原に出かせぎにいくようになって、かれの関心は学問に接するきかいの多い武家屋敷ぶけやしきに向けられました。

文化八年（一八一二）二十五さいになった金次郎は、小田原藩はんの家老かろう（大名に仕える家臣かしんとして高い地位にある武士）をつとめる服部十郎兵衛はっとりじゅうろべえの家に住みこみました。ここで、三人の息子むすこの教育係となり、夜は読書する三人のそばにすわって離れず、昼は漢学かんがくの先生の屋敷までお供ともし、子どもたちをまっているあいだ、庭にまわって障子しょうじの外から講義をきいていました。こうして、金次郎の学問への情熱じょうねつはますますたかまわっていったのです。





金次郎は学問を学び、財産ざいさんをふやしていきながら着実ちやくじつに、しかもかなりのスピードで一家の立て直しを行っていきました。このころにはすでに一町五反ちやうたん（一・五ヘクタール）近くの地主となりました。

このころは、大ぜいの人びとが伊勢参いせまいりにでかけた時代で、金次郎も富士登山や伊勢参いせまいりにでかけていきました。また、全国的に俳句はいくなどが教養きやうようとして農村にも広まっていきました。かれが俳句に親しんだり、旅行したりしたのは、ようやく生活にゆとりがでてきたからです。

## 服部家<sup>はっとり</sup>の立て直し

金次郎が住み込んだ服部家は家老職<sup>かろう</sup>の地位にありながら、生活はなかなか苦しいものでした。服部家が藩<sup>はん</sup>から受ける一年分の給料<sup>きゅうりょう</sup>はおもてむき千二百俵<sup>びょう</sup>の米でしたが、藩そのものが豊かでないため、だんだんけずられ、実際には四百三俵しかもらえませんでした。足りないお金は、返せる当てもないのに商人から借りてばかりいたので、二百五十両もの借金<sup>しゃっきん</sup>ができてしまいました。二百五十両というのは、このころでは米七百俵余りに相当する大きな借金でした。

では、なぜ、服部家の家計が苦しくなってしまったのでしょうか。

徳川時代の中で、だんだん世の中が安定してきて、便利になると、商品の数もふえ、これを取りあつかう商人（町人）の力が強くなりました。その反面、武士<sup>ぶし</sup>の給料はいつこうにふえず、そればかりか藩の財政<sup>ざいせい</sup>が悪くなり、へらされることになりました。そのうえ小田原藩も天災<sup>てんさい</sup>が続き、農村の生産力もきよくたんに落ち、年貢<sup>ねんぐ</sup>の収入も思うようにいなくなり、そのため藩士の給料も半分以上になっちゃったのです。

その服部家から金次郎に、財政の立て直しのいらいが届<sup>とど</sup>いたのは、金次郎が結婚<sup>けっこん</sup>をし、家庭を持った文化十四年の暮れのことでした。小田原藩の中でもかれが家計を立て直し、困っている村人を救ったことが評判<sup>ひょうばん</sup>となり、主人十郎兵衛<sup>じゅうろうべゑ</sup>も金次郎にいらいをしたのでしょう。しかし、金次郎は

なやみました。「自分はただの百姓だ。相手は家老様だ。よほどのかくごをしなければできないことではない。」と思いました。また、むかえたばかりの妻を一人残して服部家にいくことも心配でした。思いなやむ日が続きましたが、結局金次郎は決心して、五年の約そくでひきうけることにしました。金次郎三十二才の時でした。

金次郎は、まず服部家の収入と支出の帳面を何年分も調べ、立て直しのために計算をしました。そして、収入に見合った支出のわく（分度）を決め、そのわくを必ず守っていく必要があると考えました。そうすれば五年で借金は返し終え、六年目からはお金が残り始めると主人につげました。しかしそれには、てっていしたけん約の生活が必要であることもつげました。

そこでかれは主人と使用人を集め、こう話しました。「今後五年間、食事はいつもご飯とする物に限ること、着るものは木綿のものに限ること、必要でないことはしてはいけない。」かれのけん約はてっていしていました。女中たちに、かまの底がすすでよごれているとまきをよけいに使うので、すすをよく落としておけば、使うまきを少なくできることを伝え、節約して残ったまきは買い取ってお金にかえてあげることを約そくしました。また、家の中のむだな明かりは早く消させて、油代も節約しました。金次郎は、「むだをなくし、その物が持っている性質、良き、特ちようなどを生かしておくことがけん約につながる。」と教えました。このようにして、服部家のけん約のムードは高まっていきました。



しかし、金次郎にとっていいことばかりではありませんでした。金次郎がいらいをうけたことで、自分の家の田畑を守っていったのは妻のきのでした。また、子どもも生まれたのですが、ほどなく死んでしまいました。その悲しみと将来の不安から、きのは実家にもどってしまったのです。金次郎にとっては心のいたむできごとでした。

服部家の財政は、てっぺん約でひとまず立ち直りましたが、その後借金<sup>しゃっきん</sup>は再びふえていきました。それは、主人の十郎兵衛<sup>じゅうろうべゑ</sup>が殿様<sup>とのさま</sup>の大久保忠真<sup>おおくぼただまね</sup>について江戸屋敷<sup>やしき</sup>で生活することも多くなったので、支出<sup>しそく</sup>がふえたのが原因でした。そこで、藩<sup>はん</sup>から安い利息<sup>りそく</sup>でお金を借りて服部家の借金をすべて返し、少し多めに借りた分でお金を貸<sup>か</sup>し付けて立て直しにかそうとしました。

金次郎は服部家の立て直しのほかに、同じように苦しむ他の藩士<sup>はんし</sup>も助けるために「五常講<sup>ごじょうこう</sup>」というしくみをつくりました。五常とは仁<sup>じん</sup>・義<sup>ぎ</sup>・礼<sup>れい</sup>・智<sup>ち</sup>・信<sup>しん</sup>の五つの人としての大切な

心がけをいいます。この場合の仁とは、やさしい心がけ。義とは、借りた者が正しく返すこと。礼は、貸<sup>か</sup>してくれた人の恩義<sup>おん</sup>に感謝<sup>かんしゃ</sup>すること。智とは、借りたお金をきちんと返せるようにくふうと努力すること。信は、約束をきちんと守る真心<sup>ごころ</sup>。金次郎は、この五つの心がけを実行すれば、必ずお金は返すことができ、人間同士の信らいも守れると説明しました。これは、物やお金の正しい貸し借りは、しっかりした道徳心がなければ成り立たないという考えからでたものです。

また金次郎は、農民が苦しんでいる年貢米<sup>ねんぐまい</sup>をはかるますの種類<sup>しゅるい</sup>のちがいを統一<sup>とういつ</sup>してほしいと、殿様に願い出ました。これは父が生前<sup>せいぜん</sup>に言っていた言葉でもあり、村人の願いでもありました。その願いを知った忠真<sup>ただまね</sup>はすぐに聞き入れ、ますの統一がなされました。ますを統一することで、年貢米をおさめるときの混乱が少なくなり、農民が喜んだことはいうまでもありません。

こうして金次郎は、服部家<sup>はっとり</sup>の立て直しだけでなく、藩士<sup>はんし</sup>を



すくい、ますを統一することで、農民の苦しみを少しでも楽にしました。一方服部家はっとりの仕事は、すぐに立て直しがすつかり終わったわけではなく、その後も指導を続け、ようやく三十五年後に借金しやっ金の返さいが終わったということです。

なお、きのと別れた金次郎はその後二度目の妻をむかえました。名前をなみといいました。

金次郎の良き理解者であつたなみは、のちに多くの門人（先生の教えをうける人）たちの面どうを見ながら二人の子どもを育て、家をしっかりと守りながら金次郎の仕事をささえました。

### 改良新ます



二宮通尚さん所有  
小田原市寄託（尊徳記念館所蔵）